

遊びのスクランブル交差点

おみせやさんごっこ(1)

仲 明子

◇ 遊びのスクランブル交差点

おみせやさんごっこ、それは、昨冬我が家の六畳で、毎日毎日繰り返し遊ばれた遊びである。

おやつを終えて、つきつきにやって来た子どもたちは、各々が思い思いにみせを出す。多いときは六人もの子どもが一部屋に集まり、五時までの二時間ほどを、ほとんどけんかをすることもなく遊ぶ。それは、冬の間の三か月ほとんど毎日のように続けられた。

彼らは、外遊びのできる春・夏・秋の多くの時間を近くの神社の境内で過ごす。

おにごっこ ドッジボール 大なわ だるまさんがころんだなどのような遊びをするときは大勢で一緒に。他は互いの姿を視野に入れながら、その日の気分で数人ずつに分かれて——LはT・Yらと、NはCと、Oは他の女友達と、そして、ときにNやCと、ときにLと——。それは、木登りだったり すもう なわとび ポール遊び 砂遊び 自転車乗りだったりする。

真冬になり、内遊びを余儀なくされた彼らは、LとNの我が家の兄妹の各々の取り持つ縁で、ある日たまたま我が家の六畳で出会った。その様子は、私の目には、異なった方向から来た人々が、たまたまスクランブル交差点で出会ったときのように思われた。

そのときの私には、年齢や男女の違い（※1）、遊びの好みや今までの体験（※2）、そして、互いのなじみの深さ（※3）も違う彼らが、一つの狭い部屋で過ごせるとは思えなかった。

それが、一つの遊び——おみせやさんごっこ——を楽しめるようになっていたことには驚かされた。また、そんな遊びがあったことに、本当にホッとしたものだった。

三か月もの間、我が家の六畳という遊びのスクランブル交差点に、彼らをひきとめ続けた「おみせやさんごっこ」のどこに、それを可能にした魅力が隠されているのだろうか。それを様々な視点から探ってみたいと思う。

◇ おみせやさんごっこの始まり

夏の終わりから秋にかけて、NとCは、兄や姉の登園した後の午前中を、庭にごさを敷いてままごとをして過ごすことが多かった。それは、午後になってCの姉のOが加わると、レストランにかわる。

お客に狩り出された私を含めた四人のやりとりを横目に、L、T、Yは、庭の砂場で泥んこに、室内でブロックをと、ときに居合わせても別の遊びをしていた。

ある日、私は彼らをレストランのお客になるよう誘った。そして、彼らはこの遊びに合流することになった。それはお客になるのではなく、自分たちもおみせを出すという形で。

なぜ、彼らはお客になるのではなく、おみせやさんになることにしたのだろうか。

それが、どんなおみせやさんごっこなのかをみることで考えてみることにしよう。

(i) まず テーブル

NとCがレストランを始めて、それが広がっている。おやつを終えてやって来たOとTは部屋に入り、それを見て、

O ちゃん 今日はいきれやさん。Lちゃん テーブル貸して。

きれの入った箱を持って来て、テーブルの上に配色よく並べ始める。

T ぼくちゃん 今日はおもちゃやおばちゃんテーブル 貸して。

おもちゃの入っている箱をいくつも持って来て、テーブルの上に無造作に山積みする。

L ぼくほんやさんになろう。おかあさん テーブル。

本箱からつぎつぎに本を運んで来て、テーブルの上に並べる。

このように、毎日のようにおみせやさんごっこをするようになって、子どもたちが部屋に入って来て、まず、口にするのは、今日、自分がどんなおみせになるかであった。それは、自分は〇〇やになるから、他は別のおみせになるように、というけん制でもある。

そして、子どもたちの口からは、つぎつぎにおみせの名が発せられる。おもちゃやほんやぬいぐるみやレゴやきれやおりがみやのりものやくすりやくじやレストラン。

これらの各々は、これまで六畳で遊ばれてきたおもちゃのあれこれ——おもちゃ置き場では、各々をままとまりにして、種類ごとに箱やカゴに入れられてある——の名でもある。

すると、「おみせやさんになる」とは、自分の好きなおもちゃを一種類選んで、それをその日一日所有することでも言えようか。

つぎに子どもたちが言うのは、「テーブル 貸して」である。

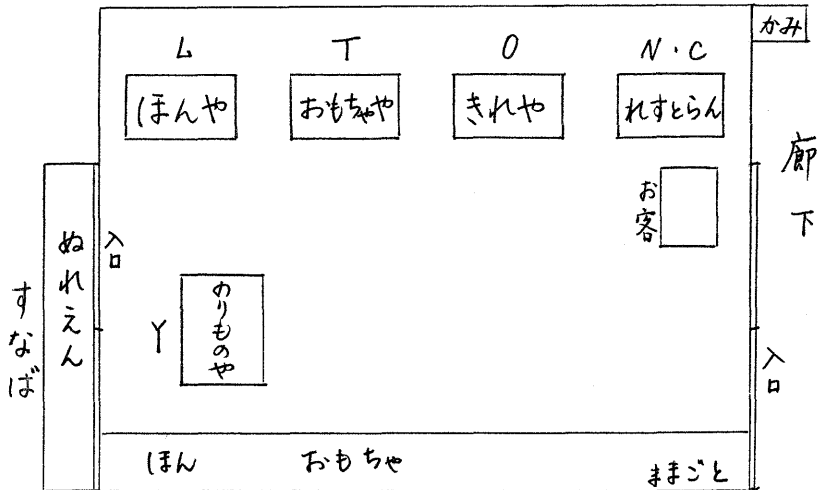
六畳にあるのは、LとNのための折りたたまれた二つだけである。私は、始まりの頃、求められるままに、別の部屋にしまつてあつたテーブルを探し出して来ては、つぎつぎに貸していった。すると、結果として、多い日には、三つものテーブルを貸したことになつた。

テーブルをもらった子どもたちは、おみせを出す場所を決めてテーブルの脚を広げる。そして、つぎつぎにおもちやを運ぶ。たちまち六畳はおもちやでいっぱいになる。そして、おもちや置き場はからっぽとなる。

このように、まず、限られたおもちやを分け合い、つぎに、六畳という狭い空間をテーブル一つ分ずつ分け合うことで、一つの遊び——おみせやさんごっこ——は、始まつた。

それは、互いをこの遊びのメンバーとして認め合つたしるしとも言えよう。

そして、幼いNとCも、この部屋になじみの薄いOも、テーブルの助けを借りて、自分のなわばり——遊びの安心基地——を持つことができた。そのことで、彼ら



ある日の六畳

は、この部屋にいごちの良さを感じたことだろう。そして、より積極的にこの遊びに加わることができることだろう。

(ii) つぎに お金を分ける

Yが来る。部屋に入るなり

Y えーと お金はどこだ。

きよろきよろとお金の入っているカンを探す。まだ誰のものにもならず、ままごとの棚の下の段にしまわれているのを見つけホツとする。自分のものにしようとカンごとつかむ。

みんな一斉に ずるーい。

T みんなで分けようぜ。

みんな、おみせをほうり出して集まって来る。カンを逆さにして色とりどりの硬貨と千円、一万円札が畳にばらまかれる。早速、ジャンケンで山分けが始まる。それはみんなで納得がいくまで続けられる。そして、つぎには

財布の入っている箱を出して来て、各々がお気に入りの財布を選び合い、お金を入れる。おみせづくりは再開される。

この様子を見ていた私は、お金が一瞬にして、その場を支配し、みんなを一つに結びつけた力に驚かされた。

私は、その後、何度もこのような場面に出会った。それは、誰かがカンに手をかけお金への関心を示すことで、突然やって来る。どんな遊びもお金への関心にはかわない。今までの遊びは一瞬にして中断し、みんなでお金の山分けが始まるのである。

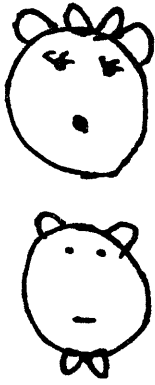
他の子が持つのなら自分も持たずにはいられない「お金」。それは、今、何かを買いたいから持ちたいのではない。それが「お金」だから持っていたいのである。みんなと同じように持っていることで安心なのである。

いろいろな遊びへの様々な関心を超えて、子どもたちは「お金」には特別の関心を持っている。それはみんなに共通するものである。

すると、このおみせやさんごっこへみんなを導いたものの一つは、お金であり、それを自分で持って離したくないYであったことに気づかされる。

誰にも共通する関心のあるお金。それを分かち合い、互いに持っていること、それは、この遊びのメンバーであることを認め合ったしるしと言えよう。

それがTとOのように、互いになじみの薄い相手であっても、お金を共有している——共通の関心であることを確認し、さらに分け合った——ことで、互いに仲間意識を感じ始めていることであろう。



(iii) そして 看板を二つ

NとCが半裁の紙と鉛筆を持ってやって来る。

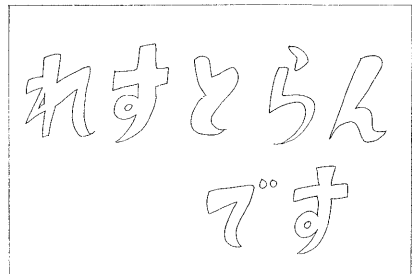
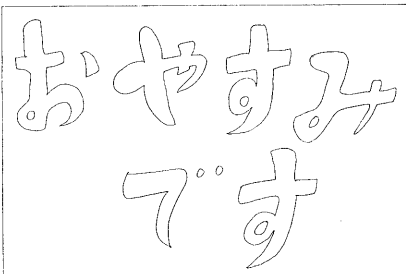
C おばちゃん 「れすとらんです」と書いて。

私 はいはい 「れすとらんです」とはい。

N おかあさん 「おやすみです」と書いて。

私 はいはい 「おやすみです」と これでもいい？

C がセロファンテープでテーブルに紙をはる。N がその上に重ねてはる。今、こちらからは「おやすみです」が見える。



テーブルを広げ自分のおみせのスペースを確保した子どもたちは、つぎに、そのテーブルに看板とも言えるような二枚のほり紙をした。一枚には自分のおみせの名が、もう一枚には「おやすみです」が書かれてある。

私は、まだ字が書けない子どもたちのために、求められるままに多くの看板を書いた。彼らはその一字一字に思い思いの色をぬることで、きれいな看板をつくった。他の子どもたちも、この遊びの中で初めての製作ともいえる看板づくりを楽しんでいた。

その中から六畳のおみせに共通する「看板」ができ上がっていった。それは、冬の三か月の間、いや、現在に至るまで工夫を加えながらひき継がれている。

その二枚の看板は、その日の遊びの終わりには、子どもたちによって大事そうにはがされて、おもちゃ置き場の台にはられ、つぎのために残された。

私は、この看板づくりがみんなに広まっていった、結果としておみせの共通するものとなっていったとき、六畳に展開するこの遊びのイメージが、また一つみんな



「れすとらん もう あいてるよ。
これは、おまけにあげるんだよ。」

に共有されたように思われた。

そして、六畳が全体として一つの遊びをしているらしく思われた。

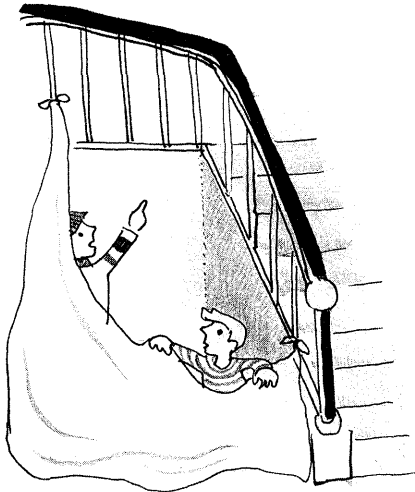
このように、レストランごっこから広がったおみせやさんごっこは、六畳に集まって来た子どもたちが、みんなで生み出していった遊びであると思う。

そこでは、彼らはみんなで遊べる遊びとして、幼いNとCの遊んでいたレストランごっこを取り入れた。そして、レストラン（ままごと）のお客になることに興味の湧かない男の子たちは、レストラン（おみせ）に隣り合って別のおみせを出すことに共通の興味をみつけることができた。

こうして、おみせをつくることから始まったおみせやさんごっこは、早速、共有する「おみせの型」を持った。——テーブルを店舗にして、そこにおもちゃを並べ、お金を分け合い、看板をつくる——それらは、おそらく各々がどこかで遊んだことのあるおみせやさんごっ

この一部であろうし、各々の持っている本物のおみせのイメージなのであろう。

しかし、それを六畳に持ち込んでみんなの前に表現し、伝え、まわりがそれをつぎつぎに採り入れていった



ことで、みんなが共有する「おみせの型」——おみせやさんごっここの遊びのイメージ——ができて上がっていった。

一つの遊びのイメージを共有すること、それはその遊びのメンバーであることを互いに認め合ったしるしでもある。

そして、メンバーと認め合った一人一人には仲間意識が生まれ、部屋全体からは一つのことをしている一体感が感じられる。その中にあるのは、なじみの深さや年齢の違いを超えて、誰もが安心感を持って遊ぶことができるよう。

私は、この遊びが、ごく初期に遊びのイメージを共有することができたことで、これから先も遊び続けられることが可能になったのだと思う。

(舞々同人)

註

※1 LとTとYは男児、Oは女児、共に五歳児。NとCは女

児、三歳児。

※2 LとTは一年間の外保育中心の自主保育を経て一年保育の川崎市立幼稚園児。

YとOは二年保育の私立幼稚園児。

家庭では、LとYは異性の妹(N)、姉と、TとOは同性の兄、妹(C)と遊んで育った。

※3 LとTとYはこの三年半の間、ほとんど毎日のように遊んできた。

NとCは夏に知り合い、それから五か月の間、毎日のように遊び続けてこの冬をむかえた。

TとO(妹のCはさらに)のなじみは薄い。幼稚園も違い、互いに、女児同士、男子同士の遊びに身近にふれる機会も少ない。二人が同室でこのように遊ぶのはほとんど初めて。互いを知るのもこの遊びを通してである。